
異世界に飛ばされて記憶をなくした少年の物語。

赤い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に飛ばされて記憶をなくした少年の物語。

【NZコード】

N1465Y

【作者名】

赤い人

【あらすじ】

とりあえず三人称で書いてみたいと思ったので書いて見ました。名前も失った少年がファンタジーワールドをどう生きていくかの物語です。

序章

少年は自分の状況をビビリとか理解しようとした。 昨日まで変わらなかつた少年の寝室、昨日まであった普遍な日常、そして昨日まであつた少年の記憶……。 何もかもが消え失せ、朝起きたらここは屋根裏部屋。 フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに少年は寝ていた。 外に出た先は一面の草原。 向こうには山があるのみ。 そう、少年は異世界に飛ばされていたのだ……！

限りなくファンタジーというジャンルがお似合いの世界。 魔法が存在し、王政やらと少年の生きた世界とは常識が全く違うこの世界で、少年はどんな生き方をするのだろうか。

先に言えば、まだ異世界に飛ばされる前の少年はかなり普遍な日常を送っていた。普通に起き、普通の食事を食べ、普通に学校に行き、普通に友達がいて、普通に勉強して普通の家に帰つて普通に寝て。恐らく、これほどまでに薄っぺらい人生を送つている少年はいないだろう。その事を知つてしまつたそいつは、彼に對してひどく同情でもしたのだろう。このまま、彼の人生を終わらせたくない、と思つてしまつたのだろう。だからそいつは、限りなく普遍な日常とは程遠い所に移したのだろう。

ところで、そんな未知体験をした少年は、

何処だ!!おおおおおお!!??

普通の人ならば当然である。叫び声を上げた
彼のよがれた普通の日常を送つて いる人物ならば尚更だ。

「えっちょっとまって？ ここにマジで何処？ 外見ればなんにも無い草原だし、ここだつて俺の家じゃないし。 てか俺だれ——」
とそこで、少年はふと止まる。

自分は一体何者だと

少年は只々睡然としていた。以前、もとい昨日までの記憶がなかつたのだ。なにも、真っ白に、少年は昨日までの記憶を思い出せなかつた。自分が誰なのかだけではない。慕つてくれた友達、自分を産んでくれた両親、そして自分が住んでいた町の風景でさえ、彼の脳髄には一切の記憶がなかつたのだ。そして少年にとつて何より苦しめたのは、それを認識してしまう「己」だつたのだ。

「……ひつぐ。おかあさん……」

ついに少年は涙を流し、やがて号泣し、もう顔さえも覚えていない母親の事を思い出そうとしていた。しかし、それは叶わなかつたのだった……。

ありつたけ泣いた末、なんとか泣き止んだ少年は、ひとまず階段を降りて下の方を見てみた。するとそこには人はいなかつたが、台所など少年がここで一人暮らしできそつながらいの設備があつた。とりあえず少年はここで生活をする事を決意し、ここにいる物を漁つてみた。すると、

「……ええ~」

刃渡り6cmほどの両方に刃がある両刃の刃物、つまり長剣を見つけた。そして実はかなりの武器マニアだった少年は、すぐにこの剣の名称を思い出す。

「なんでこんなとこに「ロングソード」があるんだよ……」

少年は呆れながら言った。「ロングソード」とは長剣としては一般的な部類にはいる剣で、西洋では広く使われていた武器の一つだ。その他にも沢山ある。一つは木を鉄で補強した盾だつたり、皮の鎧や皮の膝当てや皮でできたバンダナ、最後は皮の小手を見ついた。どうやらこの、少年が飛ばされた異世界はかなりファンタジーな世界であるらしかつた。普通家に、このような武器や防具があるはずないのだから。あるとしてもそれは觀賞用が普通だらう。しかし、今ここにすぐにでも使えそうな武具が普通に並べられているのが事実だつたりする。

とりあえず武器防具を見た事も着た事もなかつた少年は、とりあえずそこにあつた装備一式を着てみた。すると、

「あ、ピッタリだ……」

思いのほかあつたりと着れてしまつていた。大きすぎてぶかぶかでもないし、小さすぎて窮屈そうでもなかつた。それを思わせないほど彼は着こなせていた。まるですでに何十年間も着ていたかのような馴染み深い感触のよつこ……。

「……」

少年は「ロングソード」も握ってみた。やはりかなり馴染んでいた。しかしそれでも、剣術はからっきしだった。だからなのか（そもそも記憶がないのでそれを確かめようがないが）、振つてみてもあまり様になつていなかつた。

「俺つて、ここに住んでたのか？」

そうとしか考えられなかつた。確かに見る物すべてははじめてだつたが、この武具たちを着て馴染んでしまうのだから疑うのも仕方がない。だがしかし、考えてみればさつきの記憶を失つたことを認識していたことを思い出すと、

「……いや、やっぱりここには俺の住んでた場所じゃない

少年はさつきのことが気になつて仕方がなかつた。そしてそれがこの結論を導いたのである。

とりあえず、今日一日、およびこの近くのことが書かれてある地図を見つけるまでここで寝止まつて、地図みたいなものを見つけたらこの馴染んだ武具一式をもつてここを立ち去ることを決めた少年だった。

夜。既に空は暗くなり、月や星が照らす暗黒で美しい空となつていた。少年はひとまずキャンテラに火をつけ、一階の部屋の辺りを明るくした。

この部屋を漁つた結果、地図マップはあるか多種多様の道具、この世界での貨幣と思わしきコイン、金田の物品などなど、今後生活して行く上で必須とも言えるような物が沢山あつた。また食料も豊富にあり、数日は食住には困りそうにない。しかしここは、ここで目覚めたとは言え他人の家。地図を見つけた以上ここに長居するつもりは少年にはなかつた。万が一この家の者が現れた事を考えて、明日の朝にでも出発する気でいたのだ。その為に少年は道具入れ袋に長旅に必要な物をパンパンに入れた。

その前に、少年は地図を広げてこの世界の全体図を見た。有難い事に手書きなのか、この家を中心には書かれていた。

北方角 - 地図で言う所の真上の方向には、小さながら町があつた。他方の方角には町と思われるような物はなかつたので、ひとまず少年は明日この方角に行く事を決めた。

そうと言わればあとは睡眠のみ。少年はすぐ出発できるように荷物を屋根裏部屋まで持つて行き、フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに横になつて眠つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1465y/>

異世界に飛ばされて記憶をなくした少年の物語。

2011年11月4日14時03分発行